リレー　マンスリーニュース

SNOW DAY

「知財ぷりずむ」の読者の皆さん、こんにちは。米国ワシントンDCで特許事務所を経営している宮川です。前回までの「ワシントン通信」執筆者に代わって、これからワシントンで起こったことや私が考えたことをお話していこうと思います。どうぞよろしくお願いします。

記念すべき第１回目に取り上げるテーマは「SNOW DAY」です。英語をそのまま日本語にすると「雪日」となるのですが、学校など教育機関で「SNOW DAY」というと「積雪や寒波などの影響で学校が休みになる日」を意味します。この稿が「知財ぷりずむ」に載る頃には冬はすでに終わっているはずですが、今年の冬は特に寒かったです。そして、その特徴は「SNOW DAY」ということになるように思います。日本も今年は特に寒く首都圏でも相当雪が積もったようですが、ワシントンの今冬の積雪量も記録的なものになりました。私の過去18年にわたるワシントン生活において、１回の積雪量としてはもっとすごい冬が何度かありましたが、今回は積雪の回数が異常に多かったです。

私の娘の学校は、今冬は１月、２月、３月と、いずれの月にもSNOW DAYが数日ずつ発生しました。２週間ほど学校に行くとSNOW DAYで何日も休みになってしまう、というサイクルが度々発生することになりました。この原稿の期限を間近に控えての本日も、３月後半に入っているのに積雪。SNOW DAYとなって、学校は休みです。

そんな中で、民主主義の発達した米国らしくて面白いなあと思ったのが、何度も発生するSNOW DAYに我慢しきれなくなった親が学校に抗議をしたことです。

娘の学校は私立の現地校です。ということは、こう言ったら語弊があるかもしれませんが、学校側の勝手で公立のものよりも休みを多めに設定してあります。それに加えて、天候不順のときは、学校が位置する郡の決定に従って自動的に休校にするのです。

公立校であれば、天候不順時に学校に行きにくくなる子供たちの数は膨大な数になりますし、学校で働く人々の中にも学校に来にくい人がたくさんいるでしょう。しかし、娘の通うのは小さな私立校で、生徒数は三十人弱。親が子供を送り迎えしますし、郡の公立校のように遠くから通ってくる子供や教職員はいません。

このように公立校とは置かれた状況がまったく違うのに、少しでも雪が降りそうになるとあっさり公立校にならって休校にしてしまうのです。これでは、学費が無駄になるばかりでなく、子供が家に留まると仕事のある親は困ってしまいます。

そこで、業を煮やしたあるお母さんが、妻を含めた数人の親にメールを送りました。

「もともと公立校よりも沢山休むのに、天候が悪いときにそのまま公立校の決定に従うのはおかしい。このの意見に賛同する人は、校長先生にメールを送って下さい」という内容でした。妻はそれに賛同し、校長先生にSNOW DAYの規則を考え直してほしいという内容のメールを書いて送りました。また、知り合いの「ママ友」数人に依頼メールを転送したそうです。

すると、校長先生からメールが届きました。そこには、「皆さんからたくさんSNOW DAYの校則に疑問を持っているというメールを受けとりました。先生方と一緒に校則の見直しをしたいと考えています」と書かれていました。

妻が最初にメールを受けとって校長先生から返事が来るまで、わずか数時間。「言い出しっぺ」となったお母さんのメールには、There is power in numbers!と書かれていました。

同じ意見を持つ人を１人でも多く集めて説得すれば状況は変わる。娘の学校のように小さな組織も、民主主義の原則で動く――まさに「数には力がある」というのを実感させられた出来事となりました。

ところで、SNOW DAYに親がやるのは雪かきですが、学校が休みになった子供たちは

何をして時間をつぶすのか。典型的なのが「そり遊び」です。我が家の近くには斜面のある公園や老人ホームの庭があり、そこはSNOW DAYになると非常に混み合います。公園はともかくとして老人ホームの敷地内で子供たちが遊んでいるのを見たときには驚きましたが、SNOW DAYのときにはいつも解放しているようです。

そりは、千円以下で買える安いものから競技「エクストリームゲーム」でも使えそうなカッコいい数万円レベルのものまで色々ありますが、チープなそりで遊んでいる子供が圧倒的に多いです。我が家でも娘にチープなものの方を買ってそり遊びをしました。が、何度か滑るとひびが入りあっという間に壊れてしまい、典型的な安物買いの銭失いとなりました。他の子供たちが使っていたそりの多くもチープなものだったことを考えると、きっとこの冬はものすごい数のそりがゴミ箱行きになったことと思います。

筆者紹介

宮川良夫（みやがわ よしお）

United GIPs代表、弁理士・米国パテントエージェント
1956年　京都生まれ。1978年　同志社大学工学部卒業。1986年　弁理士登録、1997年 米国パテントエージェント登録。新樹グローバル・アイピー特許業務法人を初めとして、世界７カ国（地域）にて８箇所の特許事務所設立、経営に携わる。1995年以来、ワシントンDCに滞在し、現職場はGlobal IP Counselors, LLP。趣味は、Rock Creek Parkを有効利用した犬の散歩と子（孫？）育て。好きな言葉は「天地不仁」。